JENESYS 2.0

「JENESYS2.0」

2016 年度中国青年メディア関係者代表団第３陣

訪問日程　平成 29 年２月 19 日（日）～２月 26 日（日）

１　プログラム概要

中国国務院新聞弁公室が派遣した2016年度中国青年メディア関係者代表団第３陣計95名が、２月19日から２月26日までの７泊８日の日程で来日しました。（団長：鐘声（ショウ・セイ）中共中央宣伝部離退職幹部局 局長）

本事業は「JENESYS2.0」の一環として行われ、代表団は東京を始め、鹿児島、長野、福岡を訪問し、グループごとのテーマである「文化（第１グループ）」「医療（第２グループ）」「地方振興（第３グループ）」を中心に、関連企業・団体や施設の視察を行うとともに、メディア訪問、街頭での自由取材、テーマに関するブリーフ・視察を行いました。また、地方都市や歴史的建造物などの参観、温泉体験など、様々なプログラムを通じて包括的な対日理解を深めました。

２　日程

２月 19 日（日）

共通：羽田空港より入国、オリエンテーション
第１グループ：浅草寺・仲見世見学
第２・３グループ：皇居・二重橋見学、東京タワー見学

２月 20 日（月）

第１グループ：三鷹の森ジブリ美術館見学
第２グループ：小石川後楽園見学、読売新聞東京本社訪問・交流
第３グループ：（株）朝日新聞社訪問・交流
共通：日本科学未来館見学、歓迎会

２月 21 日（火）

第１グループ：茶道体験及び日本人のおもてなしに関する講義、日本放送協会訪問・交流、東京タワー見学
第２グループ：自由取材（巣鴨地蔵通り商店街）、浅草寺・仲見世見学、聖路加国際病院訪問・視察
第３グループ：浜離宮恩賜庭園見学、福岡県へ移動、岩屋グリーンツーリズム研究会訪問・交流

２月 22 日（水）

第１グループ：鹿児島県へ移動、出水麓武家屋敷群視察、ツル渡来地視察、出水市ホームステイ
第２グループ：長野県へ移動、善光寺見学、信越放送（株）訪問・交流
第３グループ：岩屋グリーンツーリズム研究会訪問・交流、福岡県による講義、博多町家ふるさと館見学

２月 23 日（木）

第１グループ：出水市ホームステイ、城山公園展望台見学、握り寿司体験、（株）南日本新聞社訪問・交流
第２グループ：松本城見学、松本市による講義、相澤病院訪問・視察、伊那市ホームステイ
第３グループ：（株）西日本新聞社訪問・交流、ラブエフエム国際放送（株）訪問・交流、自由取材（天神駅周辺）

２月 24 日（金）

第１グループ：鹿児島県による講義、自由取材（天文館商店街）、仙巌園見学
第２グループ：伊那市ホームステイ、伊那市による講義、時計づくり体験、諏訪大社見学
第３グループ：九州国立博物館見学、太宰府天満宮見学、福太郎（株）添田町工場訪問・視察
共通：和風温泉旅館での日本文化体験

２月 25 日（土）
　共通：東京都へ移動、商業施設視察、お台場海浜公園見学、歓送報告会
２月 26 日（日）
　共通：羽田空港から帰国

３　写真

＜共通＞

2 月 20 日　歓迎会　鐘声団長による挨拶（東京都）

2 月 25 日 歓送報告会　団員による感想発表（東京都）

＜第１グループ＞

2 月 21 日　茶道体験及び日本人のおもてなしに関する講義（東京都）

2 月 21 日　日本放送協会訪問・交流（東京都）

2 月 22 日　出水麓武家屋敷群視察（鹿児島県）	2 月 22 日　ツル渡来地視察（鹿児島県）
2 月 22 日　出水市ホームステイ（鹿児島県）	2 月 23 日（株）南日本新聞社訪問・交流（鹿児島県）
2 月 24 日　鹿児島県による講義（鹿児島県）	2 月 24 日 仙巌園見学（鹿児島県）

＜第２グループ＞

2 月 20 日　読売新聞社東京本社訪問・交流（東京都）	2 月 21 日　自由取材（巣鴨地蔵通り商店街）（東京都）
2 月 21 日　聖路加国際病院訪問･視察（東京都）	2 月 22 日　善光寺見学（長野県）
2 月 22 日　信越放送（株）訪問・交流（長野県）	2 月 23 日　松本市による講義（長野県）

2 月 23 日　相澤病院訪問・視察（長野県）	2 月 24 日　伊那市ホームステイ（長野県）
2 月 24 日　伊那市による講義（長野県）	2 月 24 日　時計づくり体験（長野県）

＜第３グループ＞	
2 月 20 日　(株)朝日新聞社訪問･交流(東京都)	2 月 21 日　岩屋グリーンツーリズム研究会訪問・交流(福岡県)

2 月 22 日　福岡県による講義（福岡県）	2 月 23 日　(株)西日本新聞社訪問・交流（福岡県）
2 月 23 日　ラブエフエム国際放送(株)訪問・交流（福岡県）	2 月 23 日　自由取材（天神駅周辺）（福岡県）
2 月 24 日　太宰府天満宮見学（福岡県）	2 月 24 日 福太郎(株)添田町工場訪問・視察（福岡県）

４　参加者の感想（抜粋）

【第１グループ】

〇初めての日本訪問で、文化をテーマにした分団に参加した。日本の茶道文化、温泉文化、飲食文化、鹿児島の武士の焼酎文化に至るまで、深い印象が残った。日本が伝統文化の継承を重視しているのには驚いた。多くの若者が茶道を習い、伝統的な生活や飲食スタイルを守っている家庭も少なくなかっ

た。鹿児島では、東京で大学を卒業後、Ｕターン就職や家業を継ぐ若者が多いそうだ。政府も伝統文化の継承に全力を尽くし、博物館設立に多額の資金を投じ、多くの国民の参加を促している。また中国に端を発した文化が日本で新しい発展を遂げていた。

両国のメディアを比較すると、日本の従来メディアも新メディアの影響を受けているが、日本人は新聞を読むのを好むという優良な特徴があり、中国ほどその影響は大きくないように感じた。しかし、日本の若者も情報源を従来メディアからインターネットに移行している状況で、こうした動きは今後さらに強まると思われる。中国では従来メディアが様々な試みを行い、新メディアとの融合を模索しているが、日本でそのペースは遅い。個人的には、日本も今から準備を行い、今後の転換に備えるべきだと思う。

そのほかに、未来、環境への関心の高さに感動した。多くの美しい自然、青空と大海原。日本科学未来館では科学技術や環境保護の理念を子供や国民に丁寧に伝えていた。

〇日本における農村の公共サービス、公共施設、村民の生活条件や生活レベルの高さには驚いた。幹線道路、学校、住宅、村道などの建設や計画は都市と大差が無かった。農村の生活条件も都市部と遜色は無く、ある意味においてはより豊かでさえあった。農村の人々の幸福感は高く、「農婦・霊泉・有点田」（中国の美しい農村を描いた現代小説、峨光著）に描かれるような牧歌的生活が繰り広げられていた。日本はとても公平、公正な国家であり、農村でも都市と同じような公共サービスが享受でき、経済レベルも相当程度に達し、貧富の差があまり無い。そのため、自ずと安定、調和がもたらされ、農村の人々も生活を楽しめる。これは中国が学ぶべき点である。社会の公平をいかに保つか、そして、都市部と農村部のバランスの取れた発展をいかに実現するか。

帰国後は、友人に日本の農村を訪れるよう勧め、農村の生活、公共サービス、生活条件などを見て欲しいと思う。同時に、日本がいかなる政策をもって、こうした公平公正な社会を築いたのか理解を深めたいと思う。

〇瞬く間に過ぎ去った８日間は、私の貴重な宝物になった。日本は私に忘れ難い思い出を残してくれた。訪日の感想を聞かれたら「具体的にこれと答えられないが、日本人の真面目さが、私に忘れることを許してくれない」と答えるだろう。

真面目さが日本人の隅々に行き渡っていた。

空港からバスに乗り込むと、皆の手中に一冊の旅のしおりが渡された。日々のスケジュール、活動内容、注意事項が網羅されており、今まで目にした旅のしおりの中で最も完璧、全面的で、素晴らしいと思った。三鷹の森ジブリ美術館では 10 分の短編アニメ作品を観たが、作品の背後に多数の巨匠の協働があったことを知り、協力と団結が爆発的で驚くほどの力量を発揮することを知った。皆が心から真面目に取り組むことで、そのエネルギーは想像を超えるものとなり、学ぶべきだと思った。また、日本の茶道は中国から伝わり、幾年月もの発展を遂げ、茶道文化に発展し、一服のお茶を頂くだけなのに、複雑な手順があった。そして、日本人の朝食には多くの食材や食器が使われていた。その後、日本放送協会の見学時、団員から「職員募集をする際に最も重視しているのは」との質問が出された時、「真面目な態度、そして自分の仕事のために努力を惜しまぬ決心があるか」という答えだった。茶道も、朝食も、そして職員募集も、真面目な態度が最も重要であり、事にあたる上での一番の前提条件なのだ。鹿児島県の仙巌園を見学し、その中国情緒あふれる庭に、中国にいるかのような錯覚を覚えた。一衣帯水の両国の関係が余すところなく再現されていた。

日本では化粧をしていない女性を見なかった、ゴミ箱や汚いトイレも目にしなかったし、常に時間を守り動いていた。これらは全て真面目さの表れであると思う。こうした経験や感想を多くの知人に伝えていきたい。

〇日本訪問は２回目だが、思いがけない貴重な収穫があり、一生の財産になった。一般の旅行と異なり、私の参加した第１分団は「文化」という魅力的なテーマに沿って視察訪問を行い、中日両国の「メディア関係者」の交流プログラムも組まれていた。

その中で印象深かったのは鹿児島でのホームステイだ。たった１日という短い時間だったが、ご老人のお宅で共に食事を頂き、眠り、家事をした。普通の日本人の日常生活に触れた。生活態度や習慣における両国の違いを垣間見ることができ、本当の日本を知ることができた。

また、日本放送協会や南日本新聞社、二つの特色ある現地メディアを訪問した。厳しい態度と理性をもってニュース報道を行っており、中国のメディアが置かれる環境との大きな違いを知り、自身がこれから日本関連の報道を行う上で、さらに的確に、実際に即した報道をする手助けとなった。

今回の活動では多くを学び、非常に美しい思い出が残った。

〇日本に来てから「南船北馬」という成語があると聞いた。中国にも同じ成語があり、互いの長所を学び合うという意味だ。中日両国には衝突や意見の相違もあるが、共に改善し、学び合い、交流を行い、進歩していかなくてはならない。

来日後、感銘を受けたことが２つある。まず、日本人の仕事への取り組みを手本にしたいと思った。集中、真剣、プロ意識、真面目を基本に、さらに細かい点にも完璧を求め努力していた。今回、私たちを受け入れてくださった日本側のスタッフ、視察訪問したメディア機関の関係者、全ての方々の仕事の態度はすばらしく、それは日本国民の一人一人にも言えることだと思った。もう一つは日本人の一般教養の高さだ。社会制度は敬服に値する。都市でも地方でも皆が信号を守り、指定場所でのみタバコを吸い、笑顔を絶やさない。これは日本人が培ってきた宝物であり、大事な財産である。

こうした一般教養の高い人々に支えられ、日本では科学技術が進歩し、文化が栄え、活力にあふれていた。生活には日陰の部分、数々のプレッシャーなどもあるが、それが両国の青年交流や理解増進を遮りはしない。両国の関係改善のために、共に努力したいと思う。

【第２グループ】

〇日本では 60 歳以上の高齢者が元気で、溌溂としたお年寄りと多く出会った。当初、こんな年齢で働いているのかと驚いた。我々のバスの運転手さん、自由取材で出会った商店の店主、ホームステイ先のおばあさん、元気なお年寄りはさほど珍しくないと徐々に思うようになった。その理由を考えてみた。

１、良好な精神状態。巣鴨の自由取材で会った 66 歳のおばあさんを例にしよう。おばあさんは洋服店を営み、休日は週１回。でも仕事は負担でなく、楽しいそうだ。仕事のほか、歌を趣味にしている。毎日が楽しく、笑って過ごせば 10 歳若返るらしい。確かにとても若々しく見えた。

２、医療保障。政府は財政を投入し、国民の医療負担を軽減している。病院診療や健康診断の費用負担はそれほど重くなく、病気の早期発見や悪化防止に役立っている。健康診断の結果内容に基づき、政府や医療機関はアドバイスや関連措置を講じ、国民の健康維持に努力していた。

３、看護の意識が高い。相澤病院を例にすると、ケガの治療では、早期に元の状態に戻すことを重視

しており、手術翌日よりリハビリを受けさせるというのには驚いた。中国はどちらかと言うとこの点では保守的だ。また、異なる年齢層の高齢者に、それぞれの看護サービスを提供し、老人一人一人が尊厳を持って生活できるようにしている。

〇今回の訪問では日本のソフトパワーが印象深い。

社会の文化レベルが高く、とても礼儀正しい。顔を合わせれば挨拶を忘れず、互助の精神で、社会全体の雰囲気が良い。町並みも清潔で、ゴミ１つ見かけないのは誠に気持ちがよい。道路を走る車は新旧にかかわらずピカピカで、埃をかぶった車はほぼ見かけなかった。

医療保険のレベルが高い。政府から国民まで医療健康に対する意識が高く、医療保険システムが完備され、健康診断や病気予防の環境が整っている。国民の生活習慣は良好、食事内容も理にかなっており、人々は相対的に長寿だ。特に健康寿命の概念は世界でもトップだ。

多くの国民がもてなし上手だ。今回、ホームステイを体験し、一般のお宅にお世話になったが、ステイ先のご家族は温かく、善良で、心から迎え入れてくださった。互いに友情が芽生え、非常に良い思い出が残った。

帰国後、メディアに携わる者として、こうした感想を中国の人々に伝え、双方の理解や交流の促進に微力ながら尽力したいと思う。

〇今回の訪日で印象深かったことをいくつか挙げたい。

１、礼儀正しさ。日本滞在中いつでも感じられた。言葉は異なっても、礼儀正しいお辞儀、親しみがある微笑みは心地よく、心が温かくなった。

２、新しい事物、新しい科学技術。今回、日本科学未来館を参観し、最先端技術に触れた。また、最新ロボットの見学、空港や駅の自動サービスを利用し非常に驚いた。

３、美味しい食事。毎回、豊富でヘルシーな食事を頂いた。料理の大部分が少量の油や塩で調理されていた。

４、都市ごとの特色。一度日本を訪れると、必ずまた来たいと思う。それは各都市が特色を持っているからだ。美しく雄大な松本城、時計を作製した諏訪市、長寿で有名な長野県、いずれも印象深く、絵のような風景をいつまでも眺めていたいと思った。

５、医療保障制度の完備。相澤病院や聖路加国際病院の訪問で、日本の医療や老人福祉制度に一定の理解を深めた。医療制度、医療の質がとても進んでおり、長野県の多くの都市では老人保健制度が完備していた。表面の理解にすぎないかもしれないが、多くを学び、考えさせられた。

紙面の都合上、たくさんの感想を詳しく書けない。帰国後はそれらを詳細に記録し、家族、友人、同僚に伝えたい。またアナウンサーの職にある私は、私の見た真の日本を視聴者に紹介していきたい。

〇メディアに関して。日本人は従来の方法でニュースを得ており、新聞を読む習慣が保たれている。そのため、メディア関係者の仕事の方法も従来式で、ニューメディアの影響をさほど受けていないようだった。記者もニューメディアを余り意識しておらず、取材方法や機材なども従来式だった。また、若者の新聞離れに対しては、中高校生向け新聞を発行し、新聞を読む習慣を育成していた。特に中国と比較すると、日本の学生向け新聞は国際、政治、経済など重要ニュースを扱っている。地方メディア、全国メディアともに読者や視聴者の声をとても重視しており、地方では住民に役立つメディアを強調し、読者から信頼、支持を取り付けていた。

〇2016 年度中国青年メディア関係者代表団第３陣の一員として、中国各地の記者や同業に携わる皆と東京都、長野県、松本市、伊那市など特色ある都市を訪問し、現地の食事に舌鼓を打ち、ホームステイ体験、自治体ブリーフなどに参加し、至る所が印象深く、忘れ難い。

まずは東京で、近代化都市の発展を目にし、大変便利な交通機関を体験した。美しい建築と古風な公園が並立し、近代と歴史が交差する街に強く惹きつけられた。

そして日本のアルプスの異名を誇る長野県で、新鮮な空気と黒瓦の美しい建築、また白い雪に覆われた山脈に、人と自然が完璧に融合した近代画を見ている気持ちだった。

一泊のホームステイでは、日本人の家庭にお邪魔し、同じ食卓を囲み、同じ屋根の下で眠り、本当の日本人の姿に触れた。綺麗な台所、素敵な家、温かいおもてなし、感動は極まり、心さえ通じ合えば、阻害するものが無いことを知った。

今回の訪日は本当に「心の旅」「ふれあいの旅」であった。中日関係が私の努力する方向に発展し、これから更に良くなるよう祈念している。

【第３グループ】

〇中国のメディア関係者の一員として、朝日新聞社と西日本新聞社へ訪問したことが印象深い。日本の同業者がより高みを目指し、果敢に、前向きに仕事に打ち込む姿には感銘を覚え、大変感心した。現在、中国も日本も紙媒体の情勢は厳しい。しかし日本のメディア関係者は真面目に、懸命に日々の仕事に向き合い、自分の制作したニュースを大事にし、責任を持っていた。これは両国間に存在する大きな差異であると思う。業界に対する自信、謙虚な態度、学び続ける根気が私たちには欠如していると感じた。

朝日新聞社や西日本新聞社では編集過程で当日の掲載ニュースが決定すると、紙の上でレイアウトを熱心にデザインする。こうした作業を行う新聞社は中国国内ではほとんど無くなった。こうした点でも日本の同業者の真剣さには感心した。

帰国後、友人や同僚に、日本人の経済振興に対する自信、環境保護や歴史文化を畏敬の念を持って継承していることなど、今回の体験をありのまま伝えようと思う。

〇朝日新聞社、西日本新聞社、ラブエフエム国際放送、３つのメディアを訪問し、日本では民間メディアがいかに使われ、どの程度信頼され、どういう方面のニュース等コンテンツが注目されているのか大体理解できた。また現段階でボトルネックとなっている問題や解決方法を探る状況なども理解した。

また、日本の記者の専門性の高さやニュースに対する厳格さ、粘り強い精神などから、個人的に大きく影響を受けた。

〇民間に共通する知恵を発揮し、両国の共同の発展を推進したい。

福岡県岩屋地区のおじいさん、おばあさんたちは一列に並んで大きく手を振り、ホストファミリーは爪先立ちになり私たちを見送ってくれた。たった 12 時間の滞在だったのに、皆さんは私たちとの別れをとても惜しんでくださった。

中日両国が地方振興に際して直面する共通課題である人口高齢化、地方空洞化、地方荒廃化をテーマにこの地を訪問した。ここ岩屋地区はまさしく高齢化が著しく進み、65 歳以上の高齢者が人口の 50%以上を占めるという状況に陥っていた。しかし生活を考えた場合、岩屋地区の皆さんと中国の農民、そして東京と北京、各々が抱える問題は、知恵と共通認識があれば解決が図られるのではないか

と思った。すなわち、本来の美しい自然を大切に保護、維持すれば、豊かさを手に入れられるのではないか。

岩屋地区では 3000 枚の田んぼを 700 枚に整理統合し、農地整備を実現した。私は６つの農業専門生産組合で規模集約化生産に携わり、その土地に適した方法で旅行業を発展させ就業問題を解決した。このように中国の農村でも同じような成功例を見ることができる。

発展を推進させる課題を前に、民間の知恵を活用すれば、政治の制約やボトルネックの問題の解決も可能だろう。民意を基盤に、東京と北京の友好都市が交流を行えば、１+１＞２の活気あふれる公式が成り立つことだろう。

〇短い８日間の訪問で、大都会東京の発展と賑わいを感じ、博物館、伝統が残る地方の岩屋地区、神社など日本文化継承の魅力も体験した。自分の目で見てこそ、聞き及んだことが真実となる。訪日前まで他人の目に映る日本だったものが、自分の日本になった。両者には少なからず差異があったが、日本人との交流を通し、この国を本当に理解することができたと思う。ホームステイで一般の日本人のお宅で親しく交流したこと、そして福岡の市街で一般市民に自由取材したことが印象深い。会話には多少の言葉の問題があり、また短時間の交流ではあったが、日本人の生活習慣や性格の特徴に触れ、理解することができた。日本人は外国からの訪問客にとても友好的で、自国や故郷に強い誇りと帰属感を持っていた。また、今回の活動に関わってくださったスタッフの方々から、仕事に対する真面目さと厳しさ、手抜きをしない態度、人に優しい配慮や思いやり、常に他人優先の原則に立つ、こうした日本人の国民性を感じた。他にも資源の重視、環境保護、時間厳守、自己規律、イノベーション、文化と創意の重視など、多くを肌で感じた。

日本と日本人は尊敬に値し、学ぶべきところのある「競争相手」であり、また友人である。現在、中国は急速に発展しており、経済発展の軌跡やテンポを振り返ると、日本の 20～30 年前の情勢と共通点が多く、大いに参考にしたい。日本は既に先進諸国の仲間入りをして久しいが、少子高齢化の厳しい局面にある。中国も高齢化社会に突入しており、「豊かになる前に高齢化を迎えた」という残念な状態でもあり、いかに問題を克服し、バランスの取れた発展を続けるかの課題を抱えている。両国間では多くの課題を共有でき、互いに補いながら、学び合うことができると思う。

〇今回の訪日では福岡訪問、特に岩屋地区に宿泊した夜が印象深く残っている。

地方振興が私たちの訪日テーマだった。中日両国に存在する課題に沿って、福岡県の都市部や地方、自治体や個人宅、工場や店舗、歴史文化遺跡などを巡り、福岡の自治体関係者や住民の方々と深く交流した。

少子高齢化と人口減少の状況下で、福岡では県を挙げて積極的な行動を起こしていた。自治体主導で廃校となった学校に企業を誘致し、税金減免などの優遇政策を提供していた。企業は社会への強い責任感を持ち、地域の町おこしへ積極的に参画し、福太郎（株）では社内のバスケットボール部やソフトボール部などのスポーツ活動を通して、若者のＵターン就職を奨励していた。

岩屋地区での夜、村民の皆さんとの交流を通し、地域の伝統文化を守り、地域の活力を継続させていくための熱意を感じた。地域の皆さんは自主的に委員会を結成し、伝統芸能の神楽などを保護するために多くの時間と精力を注いでいた。何か経済的フィードバックを望んでいるのではなく、地方文化の根を残したい気持ちが活力となっていた。村民は純朴、善良で、自分の故郷に大きな愛情を感じていた。

帰国後は見聞したことを中国の人々に伝え、日本メディアの発展状況や地方振興への努力などを紹介していきたい。